

国木田独歩

忘れえぬ人々論他

北野

北 野 昭 彦（きたの・あきひこ）

昭和10年 東京都に生まる

昭和37年 立命館大学大学院文学研究科

日本文学専攻修士課程修了

現 在 園田学園女子短期大学助教授

著 書 『国木田独歩の文学』（桜楓社・昭49）

国 木 田 独 歩

定価 二八〇〇円

昭和56年1月10日 初版印刷
昭和56年1月20日 初版発行

著 者 * 北 野 昭 彦

発行者 * 及 川 篤 二

印刷所 * 岩村田活版所

発行所 * (株)桜楓社

東京都千代田区猿樂町二一八一三
(〇三)二九五—八七七—
東京六一八〇二〇

0093-801122-0723 (検印省略)

北野 昭彦

国木田独歩

『忘れぬ人々』論他

桜楓社

まえがき

国木田独歩は、社会の悲惨な面や悲哀にみちた人生を彼の文学に描いたが、当時の政治的な歪みや経済的条件を問題にせず、神秘的な運命にその矛盾をかぶせている。が、そう言い切ってしまっただけでは、独歩文学のみずみずしさと作品生命の長さを説明できない、と島尾敏雄はいう。私もそうだと思う。

実は前著『国木田独歩の文学』（昭49、桜楓社）の執筆中から、私はそれに気づいていたのだが、当時は独歩の全体像の追求に終始し、その作品生命の長さの秘密に触れることができなかった。本書はその反省の上に立って編まれた。そのため、中島健蔵、藤原定、平野謙、福田恆存、島尾敏雄などの昭和の文壇・詩壇の人々の青少年時代における独歩受容、その影響の及び方、彼らが戦後に提示したそれぞれの独歩観に共通した特徴などを見定め、そういう文学を生んだ独歩の個性と原質の生成の秘密をまず探ってみた。そして、それを前提にして八篇の作品に関する作品論を試みた。まだ取りあげるべき作品があるが、それらはいずれ本書の続篇で取りあげる予定である。

なお、本書における独歩の引用原文は、すべて『定本国木田独歩全集』（昭53、学習研究社）に
拠ったが、旧字体は新字体に改めた。

昭和五十五年五月

北野昭彦

目次

序章 「潔の半生」——独歩の原質——……………9

文壇における独歩受容の側面から 「潔の半生」の

自伝性と虚構性 自然美と遍在的なものに惹かれる

素地 自己を天地の間に見出した必然性 へ驚

異 志向への伏線 日常を脱して日常の人生を見る

その原質と文学の特質

第一章 「源おぢ」——作家主体の形成と処女作の定着化——……………36

処女作としての問題 「源おぢ」の構成と「忘れえ

ぬ人々」 「源おぢ」の主題と愛の喪失の問題

成立のしかたに関する問題点 題材を発見した当時

の人生観・世界観 執筆時の状況と作品への定着化

ひとつの結論

第二章 「忘れえぬ人々」——へ小民の原像と独歩の方法——……………66

人生觀照の基本的態度 人生觀照の方法 生の

営みを背負った人生の象徴

第三章 「小春」——詩精神の再生と〈回想〉の意味——……………81

執筆時の状況と文学再生への志向 ワーズワス再読

と佐伯時代の回想 ワーズワスへ開眼した当時の状況

況 ワーズワス再読の態度と志向 “Tintern Abbey”と「小

春」の符合 再生のモチーフと独歩中期への展望

「帰去来」——湖処子・蘆花・独歩の相対化による解明——……………107

第四章 「帰去来」——湖処子・蘆花・独歩の相対化による解明——……………107

湖処子作『帰省』への心酔 湖処子批判に転じた根拠

拠 『帰省』と独歩作「帰去来」 湖処子・蘆花・独歩の故郷観とその相対化

花・独歩の故郷観とその相対化 『帰省』における二律背反の構図

「帰去来」の故郷に託された夢と願望

願望

第五章 「牛肉と馬鈴薯」——驚異による再生のモチーフ——……………136

回想による再生と驚異による再生 煩惱との戦い

「岡本の手帳」について
幻影との戦い
運命との戦い

第六章 「牛肉と馬鈴薯」——上村・近藤・岡本の相対化——……………148

人物形象に関する謎の部分
舞台設定について
近藤の上村批判
近藤の正体
近藤と岡本の相対化

第七章 「号外」——覚醒感と共生志向と状況との響き合い——……………163

「牛肉と馬鈴薯」と「号外」
〈加卜男〉と〈号外〉
の意味
特殊人物に映し出された一般状況
生
の充足感・共生感を欲する志向
執筆動機と作品世界とのかわり
覚醒と虚脱と状況との響きあい

第八章 「窮死」——生存する一分の望みもなき状況——……………179

独歩と自然主義の問題の前提
仲間の善意の果てに
ヒューマニズムと怒り
自然の無情と社会組織の不完全
〈雨〉に象徴される自然の無情
「他の吾」としての人間把握
蒼茫極まりない空の

下に見出す

「吾」の直接表現と「他の吾」での表現

あとがき

序章 「潔の半生」——独歩の原質——

文壇における独歩受容の側面から

日本の近代小説を、二葉亭から始めて、露伴、鷗外、一葉、鏡花と読み、独歩につき当たると、丁度山の中でさんざん道を迷った揚句に開豁な野原にぬけて出て、そこに清冽な小川がさらさら流れているのをみつけた塩梅です。……その作品から受ける読後の感じは、淀みのない、さわやかな、そしていくらかセンチメンタルでさえあるものです。……彼の文学の悉くが社会の悲惨な面や悲哀に満ちた人生の敗北者に眼が向けられていながら、当時の政治的な歪みや経済的条件には気がつかずに、自然に逃避し、また神秘的な運命にその矛盾をかぶせてしまっています。しかし……、こう言い切ってしまっただけでは彼の作品から受けるみずみずしい肝銘とその生命の長さを説明することが出来ません。……彼の作品が、いつまでもその魅力を失わず、むしろ時がたつに従って新鮮な度合を増すのでは

ないかと思われることは、何か不思議な感じであります。

これは、戦後派作家の島尾敏雄が、ラジオ放送の草稿として昭和二十八年に記した「国木田独歩」⁽¹⁾の、要所の抜粋である。こうした文壇人の独歩観・独歩評価は、花袋の『東京の三十年』^(大12 近代文明社)の第三十四章に記録された〈S〉と〈私〉の対話中に、すでにその相型が現われ、以来、幾世代もの人々の内に同様の独歩観が再生産されて、戦後派文学の世代に及んだと見ることが出来る。

平野謙は、「年少のころ『武蔵野』の自然描写などに導かれて、文学の世界に踏みこんでいた人はすくなくあるまい」⁽²⁾といっている。それを裏書きするかのように、福田恆存は、「ぼくたちの——すくなくともぼくの——少年時代における独歩の影響は、現代の読者の想像もつかぬくらゐ大きなもの」⁽³⁾だったといい、青野季吉は「私の心眼が、独歩に導かれて人間、自然、運命の伴らざる姿に、刻々ひらけて……私も将来、文学で立つて行ければ行きたいと云う思いが」⁽⁴⁾したと告白している。

このように独歩の影響で文学に開眼した人、あるいは独歩に強い関心をいだいたことのある人は、明治・大正・昭和の文壇・詩壇・歌壇・俳壇に数多く見うけられる。そのうち、宮崎湖処子、後藤宙外、徳富蘆花、徳田秋声、田山花袋、島崎藤村らはさておき、次の世代から以後の人々を出世順に記せば、蒲原有明、沼波瓊音、真山青果、中沢臨川、正宗白鳥、吉江喬松、

小山内薫、相馬御風、志賀直哉、片上伸、中村星湖、石川啄木、若山牧水、武者小路実篤、中村武羅夫、蘆谷蘆村、山本有三、久保田万太郎、江馬修、青野季吉、坪田譲治、日夏耿之介、芥川龍之介、佐藤春夫、西条八十、浜田広介、中西伊之助、井伏鱒二、木村毅、黒島伝治、中野重治、中島健蔵、福田清人、神崎清、唐木順三、瀬沼茂樹、藤原定、平林たい子、本庄陸男、伊藤整、亀井勝一郎、岩上順一、平野謙、野田宇太郎、中村光夫、戸川エマ、福田恆存、久保田正文、佐古純一郎、小島信夫、島尾敏雄などをあげることができる。

独歩没後、昭和初期と第二次大戦後との二度にわたって、文学史上の大きな転換期があった。それゆえ、青野季吉のように、独歩の影響から「脱却するため、後年どれだけ苦しんだか知れない」という人もいた。

だが、独歩の文学は、この二度にわたる転換期をくぐりぬけて評価されてきた。それを如実に示しているのは、さきの島尾敏雄の独歩評価であり、また、中島健蔵、藤原定、平野謙、福田恆存らの戦後における独歩評価である。中島健蔵は、「現在も必要な考え方の源が独歩にある⁽⁵⁾」といい、詩人の藤原定は、

独歩が小説を書きはじめた明治二十九年からざつと半世紀以上も経つた今日の文学は、独歩文学にくらべればざつと知的にも複雑にもなつてきているが、しかし独歩ほどの真実感をもつて迫ってくるものは甚だすくない⁽⁶⁾。

と揚言しており、福田恆存もまた、

今日の若い世代には、独歩はむしろ忘れられた作家に属するかもしれませんが、それはなにも独歩が古くなつたからではなく、時代が混乱し、文学概念がいまいになつてしまつたからでありませう。⁽⁷⁾

といっている。さらに、平野謙は、

ひさしぶりに独歩の作品を読みとおして、ほとんど見忘れていたある原初的なものをよびさまされた思いがした。「武蔵野」「空知川の岸辺」のような作品から、私は依然としてある鮮烈な印象をうけ、そういう印象が、現在の騒然たるジャーナリズムにすつかり組みこまれてしまつている私自身の自己喪失によるものであることを、再認識しないわけにはゆかなかつたのだ。……独歩の苦闘から生じた生の哀感⁽⁸⁾は、藤村や花袋などの「純文学」ふうな作風とはちがつた根源の力を、今日も示唆していると思う。

と現代的状況の中で独歩をとらえ直し、評価し直している。

独歩の影響の及び方については、独歩離れするために苦しんだ青野季吉と、独歩研究に生涯うちこんだ中島健蔵とが、期せずして同様のことに言及している。すなわち、青野季吉は、さきの文章のなかで、

独歩の文学には、当時の少青年を感動させ、同化させるそういう特別の魅力があつた。私

たちのような文学心酔者はかりでなく、将来政治家を志して、運動場で独り演説の稽古しているような生徒や、試験勉強一点張の生徒なども、独歩の作品だけは面白がっていた。と述べている。これには、鈴木茂三郎が生涯、独歩を愛読していたことが思いあわされる。こうした点について、中島健蔵は、

独歩の影響は、文学の世界の中で受けつがれただけでなく、読者の中に根をおろし、意外なところまでひろがっているとも推定できる。……それがいつまでも意識の中に刻みこまれて、ときどき、なにかのきっかけで、われわれに自己存在の自覚を与え、目に見えないところで生き方に影響を与える。⁽⁹⁾

と指摘するとともに、そういう独歩の文学の本質を、「現実生活の暗い雲の切れめに光る青空のような、人生観の精髓」⁽¹⁰⁾、あるいは「泥沼の中から抒情された美しさ」⁽¹¹⁾としてとらえ、これを「時代を越えた、ある一つの抒情」⁽¹²⁾というふうに結論づけて評価している。

こうした独歩の文学を生んだ創造の秘密、創作主体の問題にも言及して注目すべき見解を示したのは、中島健蔵、藤原定、福田恆存らである。中島健蔵は、独歩の創作の秘密を、

俗世間の塵のうずまく日常生活の雲の切れ目に、きらりと輝く人生への「驚き」である。この「驚き」の光によって照し出された人生が、そのまま彼の作品となる。……彼は、人生に触れる触角のようなものを持っていたのである。⁽¹³⁾

と述べている。これは、秦一郎の次の言葉と相通じるものであろう。

独歩の作品は……、自己にまつはる一切の妄執はきれいさっぱり払ひのけて、ひたすら人物や事相の新しい発見による生の充実感——純粹感動だけを描出しようとする。この場合、作者は舞台面から姿を消して、象徴化された点景人物のみが、言はば独歩光線^{（13）}とでも称すべき光の中にスポットライトされるしくみなのだ。……独歩文学の不思議な魅力——あの澄みきつた清純な感銘は、完全燃焼をとげた自己の放つ強烈な白光なのだ。^{（14）}

独歩が「人生に触れる触角のようなものを持っていた」という点を、藤原定は別の言葉で、独歩はこの出会い、人と人とがふと見交わす眼の中にふくまれるたましいの默劇を信じていたばかりでなく、それを受けとる天才であつたのだ。「源をぢ」や「置土産」^{（15）}は、そういう愛ふかい眼が一瞬に読みとつたものをくりひろげた世界なのである。

といっている。福田恆存も同じところに着目して、独歩が「牛肉と馬鈴薯」のなかに「喫驚^{びつくり}したいといふのが僕の願」^{（16）}いと記しているのは、「積極的な感動への要求」であり、そのため独歩は「局外者として立つて」、

「袖すりあふ」一刹那に全心をもつて相手を受さうといふのであります。もしさうしなければ、ひととひととの交情は泥沼のような現実のなかに、やがて腐臭を発するようになるであります。愛の新鮮な感動を求めるために、独歩はつねに局外者のように、旅行者の

ように生き、かつ書いたといへませう。

と述べ、そうすることによって「独歩は一茶飯事のうちに時空を絶した生の真相を発見しようとした」のだと洞察している。⁽¹⁶⁾

彼らのこうした独歩観・独歩評価は、独歩研究の上に多大の示唆を与えてきたと思う。

ところで、そういう独歩の文学の「不思議な……魔力」（島尾敏雄、前掲書）の根源は何であり、そういう独歩の文学の質と創作方法を生みだした創作主体の原質は、どうして生成されたのか。これは、独歩の青年期の「精神上の大革命」に先行する問題である。

この点は、独歩研究史の全般を見わたしても、まだ充分に探求されていないと思う。それを完全に究明しつくすことは不可能に近いであろう。が、その原質の生成された秘密の一端くらいは探ることができであろう。

実は、その糸口はすでに私たちの前に提示されている。たとえば中島健蔵は、それとは気づかず、その二点に言及している。一つは、

独歩は、……真の故郷を持たない人間であった。生れたのは千葉県の銚子である。司法省の官吏であった父の転任に従って、幼少時代には、東京から山口、広島、岩国、ふたたび山口など、転々として居を移している。彼は、自分の意志とは無関係に、どこにでも住みつぎうるが、どこにも執着しないですむ人間として育てられて来た。……いわゆる「郷土」